The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<図書紹介>水牛くらぶ編集『モノ誕生「いまの生活」1960-1990 日本人の暮らしを変えた133のモノと提案』晶文社1990,665P
Author(s)	増山, 和夫
Citation	デザイン理論. 1992, 31, p. 93-94
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52919
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

図書紹介

水牛くらぶ編集　『モノ誕生「いまの生活」1960－1990 ―日本人の暮らしを変えた133のモノと提案』 晶文社　1990，665P

本書は，近代の日本で生活がもっとも大きく変わった時期を，明治の文明開化期と，大正デモクラシーの時代と，60年代からの高度成長期の３つではないかという仮設のもと，60年代以降の30年間に焦点を絞って，戦争でも変わらなかった日本人の生活を劇的に変えたモノが，いつ，誰の手によって，どのように誕生したのかを，それぞれに関連する資料にもとずいて，明らかにしようとする。開発者が描いた理想的な生活イメージと，実現された生活とは必ずしも同じではない。

本書は，われわれがモノを説明しようとすれば必ず，そのモノに伴うコトについて語らなければならないこと，あるいは，モノの開発には，ストーリーが伴うことを如実に示すものでもある。

本書では，上記の30年間を，1960年代，1970年代，1980年代に分け，それぞれの時期に開発され，その時期を特徴づけたモノが，「衣」「食」「住」「道具」の４つの領域に分類されている。それぞれについて，開発メーカーあるいは図書館などで収集された文献資料が，年代別に構成されている。また，それぞれの領域についての年代別の解説が，解説・監修者と編集者との対談形式にしてまとめられ，文献資料と平行するかたちで掲載されている。読者は，文献資料をパネラーの発表，解説をモデレーターによるまとめとして，まるでパネル討論会に参加しているように，読み進めて行くことができる。編集者が，自ら本書の特徴として上げているように，本書はモノに関連する文章と図版によって構成された資料集である。

ここに集められた資料は，①個人・企業・行政などあらゆる分野で，日本人の暮しをリードしてきた「新しい生活の提案者」たちが，その時々に発表してきた第一次資料。モノに関する直接の資料が存在しない場合は，回想，社史，評論，ルポなど。②モノそのものというわけではないが，モノに関わる生活の提案。③モノによって示される生活の提案に反対の意見，などに分類される。家庭生活に関わりのあるもの，生活のスタイルを変えたものを中心に収録し，純然たるビジネス用品，遊びやスポーツ用品は外されている（p. 17）。資料を集める段階での体験から，60年代は，モノがまず登場してきて，その発想，開発についての資料がない時代。70年代は，モノと情報が同時にでた時代。80年代は，まず情報があり，その後にモノがあらわれる時代（p. 16）であることが明らかにされた。このことは，それぞれの時代において，デザインに寄せられた期待やその存在価値と妙に符合している。

本書には，133のモノと提案についての資料が収録されている。それら集められた資料は，年代ごと，領域ごとに，それぞれを特徴づけるキーフレーズを提示しながらまとめられている。それぞれのキーフレー

ズを見るだけで，その年代の，その領域では，何が特徴的であったかが，ある程度わかるように配慮されている。資料と解説の掲載順序は，年代ごとにまとめられた4つの領域について，それぞれを個別に読み進めるかたちになってはいるが，領域相互の関連性，あるいは年代を越えたつながり，関連を見ることも重要である。それぞれの資料を，いわば縦・横・斜めに関係づけて考察することもできる。本書では，一年代の一領域について集められたモノや提案の数は，それぞれ多少の違いがあるものの，年代ごと，領域ごとの総計は，ほぼ同数になっている。これが単なる偶然か，意図されたものかは不明である。

60年代は，高度経済成長が生活にまで及んだ時期であり，理想的な生活の手本はアメリカであると考えられていた時代である。もっとも変わったのは家庭の台所であり，既製服のサイズ統一，インスタント食品，プレハブ住宅，家電など，工業化の波が押し寄せてきた時代でもある。食品公害もあらわれ，いまにつづくあたらしい時代の要素がすっかり出そろった時期である。

70年代は，モノが一通りゆきわたり，ただ便利で機能的であるだけでなく，デザインに凝った，小型化されたモノが求められ，登場する。自分らしさや個性を表現するために，他人とはどこか違うものが欲しくなる。オイルショックを経験しても，使い捨てに慣れた生活は変え難いことに気づいた時代である。

80年代は，多品種少量生産というかたちを変えた量産によって，モノはあいかわらず日々生み出され，エレクトロニクス製品も加わって，さらにモノが氾濫する。モノはその実質や機能性によってではなく，その記号性を通して，われわれの生活に働きかけると受け取られる（p.17）。

このようにみてくると，この30年間は，A.マズローのいう人間の社会的欲求の5段階の内の，第3段階から第4段階への移行にすぎないように思える。無数にあるかのように見える選択肢に戸惑っている限りは，当分第5段階の「自己実現」には行き着けないのかも知れない。本書につづけて，1990年代を問題にするとしたら，どのようなモノや提案が取り上げられることになるのだろうか。

われわれの日常生活は，多くのモノにとり囲まれて成り立っている。一生活者の立場からすれば，日常使い慣れ，親しんでいても，われわれは，それらのモノの生まれや育ちには案外無関心である。しかし，モノは，いつのまにか人々の生活の中に浸透し，その生活を大きく変えて行く。そのことに気づくとき，モノの発想と開発，商品化の過程に携わるデザイナーは，その責任の重大さをあらためて認識しなければならない。

増山和夫　京都工芸繊維大学